2024年2月19日

京都市京セラ美術館2024年度　展覧会情報

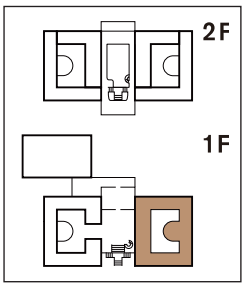
リニューアルオープンから5年目を迎える京都市京セラ美術館では、歴史と現代性を併せ持つ美術館として、2024年度もバラエティに富んだラインナップで皆様をお迎えします。
特別展として、京都市立芸術大学の京都駅東部エリアへの移転を記念し、京都市立芸術大学ゆかりの日本画家を取り上げる展覧会を開催します。大成した日本画家の卒業制作など初期作を、その後制作された名作とともに展示し、「芸術の学び舎」の歩みを紹介します。新館 東山キューブでは、気鋭の写真家・蜷川実花の個展を開催します。艶やかな色彩を持つ彼女の作品は、生と死、一瞬と永遠という相反するものが共存しています。今を生きることについて改めて考える展覧会となるでしょう。
その他にも、リニューアル後はじめてとなる大型ファッション展「Gucci Cosmos（グッチ・コスモス）」、年代を問わず親しまれてきたテレビ番組とジブリ作品を紹介する「金曜ロードショーとジブリ展」、当館の名品コレクションを堪能するコレクションルーム、京都ゆかりの新進作家を個展形式で紹介するザ・トライアングルなどを開催します。

お断り：2024年度の展覧会は、京都市の予算が成立することを前提としているため、展覧会に係る予算が成立しない場合は、開催を見送ります。また、社会情勢によっては、会期等が変更になる場合がありますので、あらかじめご了承ください。

広報お問い合わせ
京都市京セラ美術館 広報　勝冶・川口
TEL: 075-275-4271　E-mail: pr@kyoto-museum.jp
※広報事務局の記載がある展覧会についてのお問い合わせは、各広報事務局までお願いします。

京都市立芸術大学移転記念
特別展「巨匠たちの学び舎　日本画の名作はこうして生まれた」

2024年10月11日（金）～12月22日（日）
前期 10月11日（金）～11月17日（日）
後期 11月19日（火）～12月22日（日）
本館 南回廊1階
主催：京都市、毎日新聞社、京都新聞



2023（令和5）年、京都市立芸術大学はキャンパスを京都駅東部へ全面移転しました。京都市立芸術大学は、1880（明治13）年に京都府画学校として開校して以来、何度も校地を移転しながら歴史を重ねており、今回もまた新たな歴史の1ページとなります。
京都の画家たちが、日本画の将来を託して紡いだ学校の歴史。竹内栖鳳、山元春挙などが教壇に立ち、土田麦僊、村上華岳、小野竹喬ら数多くの画家が学びました。その後巨匠となり、京都画壇に燦然と輝いた画家たちの若き日の挑戦や、また教員となった画家たちが京都の代表として矜持をもって制作した作品は、学校の歴史とともに存在します。
本展では、大学の前身である京都府画学校や美術工芸学校、絵画専門学校など近代における歩みを資料によって振り返り、それら学び舎が育んだ日本画の名作をご紹介します。

菊池契月《散策》1934年
京都市美術館蔵

展覧会のみどころ

1. 40人以上の有名画家を一堂に紹介
学校時代に、悩みながら制作した卒業制作や画壇デビュー作といった初期作と、評価を高くした充実期の代表作が並ぶ貴重な機会です。

2. 豊富な資料で美術学校を紹介
明治～昭和の美術学校ってどんなところ？学生生活や教育に関する資料を展示し、近代美術教育についても深堀りします。

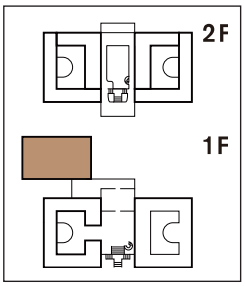
【主な出展作家】
竹内栖鳳
菊池契月
木島桜谷
都路華香
村上華岳
土田麦僊
小野竹喬
堂本印象
徳岡神泉
山口華楊

山元春挙《山上楽園》1922年
京都市美術館蔵

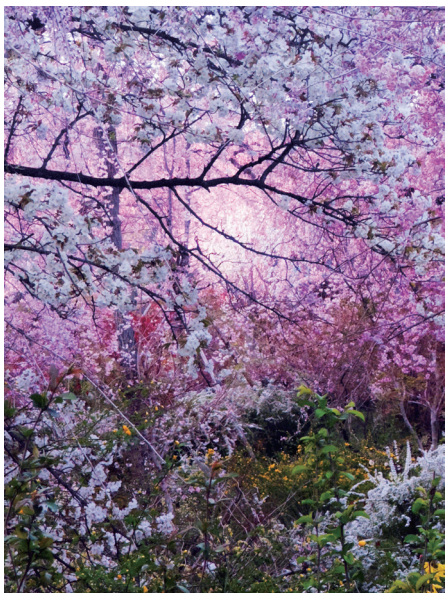
村上華岳《阿弥陀》1916年
京都市美術館蔵

特別展「蜷川実花（仮称）」

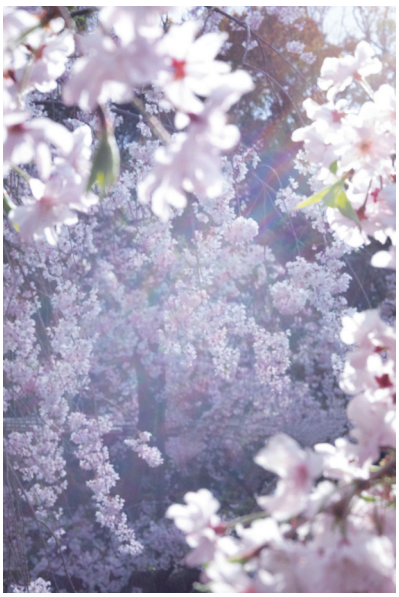
2025年1月11日（土）～3月30日（日）
新館 東山キューブ
主催：京都市ほか



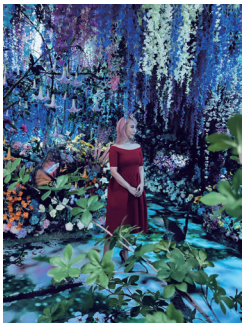
写真家・映画監督の蜷川実花による、関西ではじめてとなる美術館での大型個展。日常の中にある儚い美しさを永遠の存在として昇華する蜷川実花の制作姿勢を体現した作品の数々が、研究者や建築家、音楽家といった異なる分野の才能と共創された空間の中で構成されます。
大型の映像インスタレーションを含む多様な手法で表現された作品群は互いに関連し合い、暗闇から鮮烈な色彩まで様々な表情を持ち、静かに鑑賞者の感情を揺さぶります。まるで人工の楽園を歩むかのような体験は、現代社会でたおやかに光を見出す彼女の作品世界をナラティブに追体験させ、内省的な旅へと鑑賞者をいざないます。


©mika ninagawa
Courtesy of Tomio Koyama Gallery

©mika ninagawa
Courtesy of Tomio Koyama Gallery


©mika ninagawa
Courtesy of Tomio Koyama Gallery

蜷川実花（にながわ・みか）

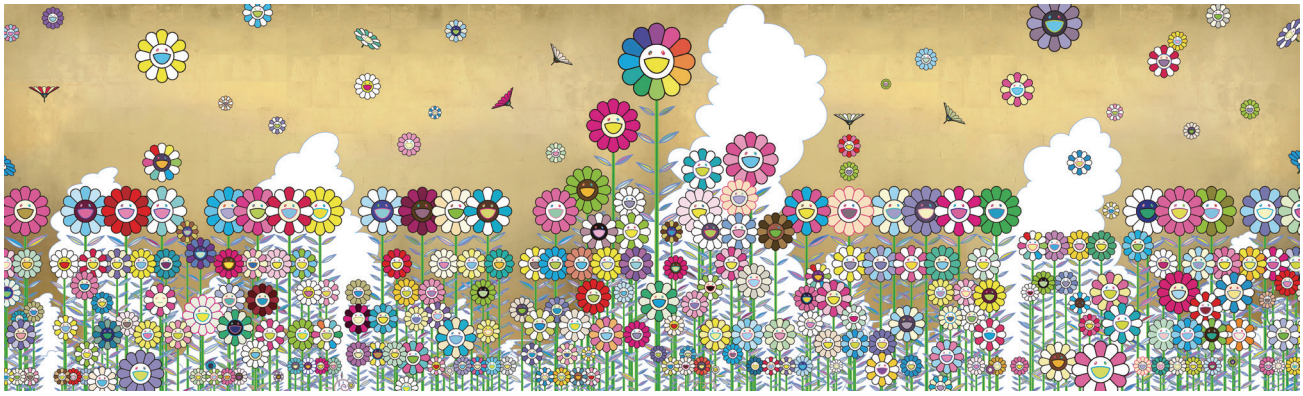


写真家、映画監督。写真を中心として、映画、映像、空間インスタレーションも多く手掛ける。クリエイティブチーム「EiM:Eternity in a Moment」の一員としても活動している。木村伊兵衛写真賞ほか数々の賞を受賞。2010年にはRizzoli N.Y.から写真集を出版。『ヘルタースケルター』（2012年）、『Diner ダイナー』（2019年）はじめ長編映画を5作、Netflixオリジナルドラマ『FOLLOWERS』を監督。最新写真集に『花、瞬く光』がある。
主な展覧会に「蜷川実花展：Eternity in a Moment 瞬きの中の永遠」（TOKYO NODE、2024.2.25まで開催中）、「蜷川実花 瞬く光の庭」（東京都庭園美術館、2022年）、「MIKA NINAGAWA INTO FICTION / REALITY」（北京時代美術館、2022年）、「蜷川実花展—虚構と現実の間に—」（国内美術館を巡回、2018年-2021年）、「蜷川実花展」（台北現代美術館、2016年）などがある。2024年4月には弘前れんが倉庫美術館にて「蜷川実花展 with EiM：儚くも煌めく境界」を開催予定。
https://mikaninagawa.com

京都市美術館開館90周年記念展「村上隆 もののけ 京都」

【開催中】 2024年2月3日（土）～9月1日（日）
新館 東山キューブ
主催：京都市、朝日新聞社、京都新聞、NHK京都放送局、NHKエンタープライズ近畿
クリエイティブ・パートナー：ソニー・ミュージックエンタテインメント

現代美術の最前線で活躍する村上隆（1962年生まれ）の国内で約8年ぶり、東京以外で初めての大規模個展を開催中です。村上が活動初期から深い関心を寄せてきた江戸時代の絵師たちが活躍し、今なお、あらゆる芸能と芸術が息づき交わりあうここ京都を舞台に、新たに描きおろした超大作をはじめ、代表的なシリーズ、国内初公開となる作品など、大多数が新作となる約170点で構成される新・村上ワールドをお楽しみください。



村上隆《金色の空の夏のお花畑》（参考画像）2023年 デザインデータ
©2023 Takashi Murakami/Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.

広報事務局（問い合わせ）：※平日のみ（土曜・日曜・祝日を除く）10時～16時
「村上隆 もののけ 京都」広報事務局（共同PR内｜担当:三井）
E-mail：takashimurakami-kyoto-pr@kyodo-pr.co.jp　TEL：03-6264-2382

「金曜ロードショーとジブリ展」

2024年4月12日（金）～6月29日（土）
本館 北回廊2階
主催：京都市、読売テレビ

© Studio Ghibli

あなたの「初めての映画」は金曜ロードショーではなかったでしょうか？昭和 平成 令和と「映画」と私たちをつないできた「金曜ロードショー」。
公開年に関わらず名画と出会うことができた時間。知らなかった世界に初めて出会う時間。
そんな番組が始まった1985年は、スタジオジブリがスタジオ開きをした年でもあります。
本展ではその1985年を起点に、「金曜ロードショー」の歩みを辿りながら、スタジオジブリ作品の魅力を紹介します。

広報事務局（問い合わせ）：
「金曜ロードショーとジブリ展」京都展広報事務局（株式会社ネネラコ内）
E-mail：kinro-ghibli-kyoto@nenelaco.com
TEL：06-6225-7885　FAX：06-7635-7587

GUCCI COSMOS

2024年10月1日（火）～12月1日（日）
本館 北回廊1階、新館 東山キューブ
主催：グッチ、京都市

Courtesy of Gucci

イタリアを代表するラグジュアリーファッションブランド グッチによる大規模な世界巡回展「Gucci Cosmos」を、上海、ロンドンに続き、当美術館を舞台に開催します。本展では100年を超えるグッチの歴史の中でも、特にアイコニックなデザインを世界中から集め、没入型インスタレーションとして展開します。ブランドを象徴するモチーフやアイテムが、いかにして絶えず時代を映し出し、同時に自ら時代を定義してきたかをご紹介します。また、上海とロンドンでの開催と同様に開催地独自の視点を織り込み、京都そして日本特有の文化に共鳴するストーリーやエレメントにもスポットライトを当てます。

グッチ（GUCCI）
1921年、フィレンツェで創設されたグッチは、世界のラグジュアリーファッションを牽引するブランドのひとつです。ブランド創設100周年を経て、グッチはクリエイティビティ、イタリアのクラフツマンシップ、イノベーションをたたえながら、ラグジュアリーの再定義への歩みを続けています。グッチは、ファッション、レザーグッズ、ジュエリー、アイウェアの名だたるブランドを擁するグローバル・ラグジュアリー・グループであるケリングに属しています。詳しくは、www.gucci.com をご覧ください。

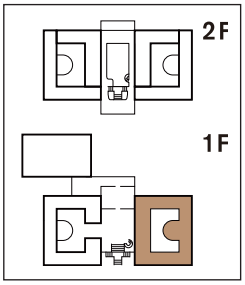
広報事務局（問い合わせ）：
「GUCCI COSMOS」（グッチ ジャパンPR）
E-mail：ggj.pr@gucci.com
TEL：03-5469-6623

「第11回日展京都展」

2024年12月21日（土）～2025年1月18日（土）
本館 北回廊1・2階、南回廊2階、光の広間
主催：第11回日展京都展実行委員会（京都市ほか）

日本最大規模の総合公募展「日展」の京都展を今年も開催します。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門にわたって、全国を巡回する基本作品と京都・滋賀の作家による地元関係作品の計約500点をご覧いただけます。

コレクションルーム



当館のコレクションは、近代以降の京都の美術（日本画、洋画、彫刻、版画、工芸、書）を中心に現在約4,200点を数えます。明治期から昭和期の京都画壇の近代日本画・洋画などには全国有数の名品が揃っているほか、近年は世界の巨匠版画を集めたZERO コレクション、また平面表現における現代美術の変遷を30年にわたって捉えてきたVOCA展の受賞作など多数の新収蔵を受けています。
コレクションルームでは、竹内栖鳳、上村松園、木島櫻谷など京都を代表する人気の名作紹介に加え、テーマ特集展示を通じて、京都を基軸とした近代から現代の美術の面白さをたっぷりと体感していただきます。

観覧料　一般※1京都市内在住の方：520円/京都市外在住の方：730円
　　小中高生等　京都市内在住の方：無料※2／京都市外在住の方：300円、
　　小学生未満　無料

※1 京都市在住の70歳以上の方（身分証明書をご提示ください）、障害者手帳等を提示の方およびその介護者1名は無料です。京都市キャンパス文化パートナーズ制度に登録している京都の大学に通学する学生の観覧料は100円です。
※2 京都市在住または通学の小学生・中学生・高校生・高等専門学校

夏期 2024年7月19日（金）～9月27日（金）
特集「女性が描く女性たち」

女性が女性を描くとき、どんな女性をモデルにするのでしょうか。日本では「美人画」というジャンルが明治から昭和にかけて形成されました。そして、当時の数少ない女性画家たちは、同性ならではの視点で捉えた女性像を描きました。興味深いことに、その多くは、流行の服に身を包んだ女性や働く女性、また作家自身の何気ない日常のあるがままの姿を描写しています。当館では、「美人画」を描いたとされる代表的な画家、上村松園や伊藤小坡をはじめ、秋野不矩や梶原緋佐子など、京都画壇で活躍した女性画家の作品を数多く所蔵しています。本特集では、それら珠玉の作品を集めて展覧し、当時の女性画家の画業や彼女たちの見た美しい女性像を探ります。

秋野不矩《紅裳》1938年　京都市美術館蔵

梶原緋佐子《暮れゆく停留所》1918年
京都市美術館蔵

冬期 2025年1月10日（金）～2月24日（月・振休）
特集「世界が見惚れた京都のやきもの～明治の神業（かみわざ）」

欧米の強国が日本に迫り来る明治時代、京都では、世界を驚嘆させたやきものが生まれました。万国博覧会で人気を博し、多くが海外へ輸出されたため、その存在は長らく謎に包まれていましたが、近年になってようやく国内外で紹介されるようになりました。中でもこの世のものとは思えない美しい釉薬や上品で精緻な浮彫が施された三代清風與平の器は、その希少さゆえに、多くの西洋人コレクターを魅了しました。本展では、三代清風與平を中心に、初代宮川香山、初代伊東陶山らによる明治・京都が生んだ卓越した美と技術の粋をご覧いただきます。

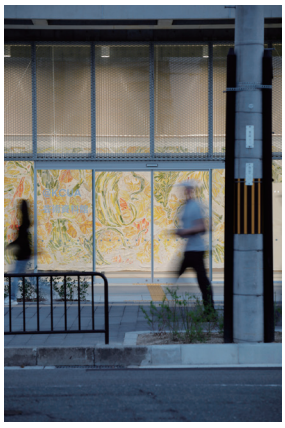
三代 清風與平《牡丹木蓮浮文釉下彩色絵壷》明治期
関 和男氏蔵

宮川香山《樹林鹿文釉下香炉》明治期
関 和男氏蔵

ザ・トライアングル

美術館のリニューアルを機に、新設されたスペース「ザ・トライアングル」（北西エントランス地下1階・観覧料無料）。新進作家の育成・支援の機会を創出するとともに、市民や観光客など来館者が気軽に現代美術に触れる場を提供しています。これまでに累計13人の京都ゆかりの新進作家による瑞々しく新たな感性を紹介してきました（2024年3月現在）。2024年度は下記の4人・組のアーティストを紹介します。
なお本事業には、「新進作家支援・育成事業等のためのチャリティ・オークション＆ガラ・ディナー」を通じたご支援をいただいております。

川田知志（かわた・さとし）｜2024年7月16日（火）～10月6日（日）



《「still moving final: うつしのまなざし」学長室壁画引越しプロジェクト》
2023年
画像提供：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA　撮影：来田猛

川田知志は、都市や郊外の均質化した景色から、その地域を特徴づける要素を題材に、伝統的なフレスコ画の技法を応用した作品を制作してきました。漆喰と顔料で描かれる植物や看板などの都市・郊外のイメージは断片化し再構成され、時に私たちの身体や展示空間全体をも覆うようなスケールで表現されます。また近年は、壁画の表層を移し替える技法「ストラッポ」を用いて、カンヴァスなど別の支持体の上に移す作品を手がけています。場所と強い関係性を結ぶ壁画ですが、この手法で川田は壁面や建築が持っていた記憶を、別の空間や場に仮構させることを試みています。
本展では「郊外」「観光」を手掛かりにリサーチした新作を発表します。これまでの実践を通じて、現代における壁画のあり方を模索してきた川田が立ち上げる新たな景色を是非ご覧ください。

1987年大阪府生まれ。2013年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了。現在、京都府京丹後市拠点。大学でフレスコ画を学び、銭湯や市役所など様々な公共空間で制作、発表。都市近郊の均質化した景色をモチーフにしながら現代社会を記憶する壁画を目指し活動している。近年の主な展覧会に個展「彼方からの手紙」（ARTCOURTGALLERY、大阪、2022年）、「ホモ・ファーベルの断片―人とものづくりの未来―」（愛知県陶磁美術館、2022年）、「still moving final: うつしのまなざし」学長室壁画引越しプロジェクト（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、2023年）など。

MIKADO2（ミカド ツー）｜2024年10月19日（土）～12月22日（日）

山田周平、小池一馬、神馬啓佑の3人によるアーティスト・コレクティブ、MIKADO2 。「ha,ha,ha」をリピートするだけの平面作品や「明るい未来」と表示されたネオンサインの作品など、ダダ的な哄笑を誘うコンセプチュアルな作品を制作する山田、文化人類学的な視点から各地の偶像をモチーフにオリジナルな土偶的な陶の作品を作る小池、極めて個人的な体験と美術史の物語を重ねた絵画表現を試みる神馬という個性的な３作家による協働は、独特なグルーブ感を得て現代的なテーマに取り組みます。
MIKADO2は、芸術のフォーマットに「欠落」または「ズレ」を作り出し、そこに一見すると無意味な遊びのような制作行為と態度を伴い補完することを試みています。

MIKADO2 |アーティスト・コレクティブ。2021年に山田周平、小池一馬、神馬啓佑、金光男の4人で結成（その後、2023年に金光男は脱退）。展覧会は瑞雲庵（京都、2021年）、TEZUKAYAMA GALLERY（大阪、2022年）、高島屋T8ギャラリー（京都、2024年予定）にて開催。

山田周平（やまだ・しゅうへい）｜アーティスト。1974年生まれ。多摩美術大学中退。京都市在住。主な個展に、SOKYO ATSUMI（東京、2023年）など。2003年、写真新世紀優秀賞受賞。

小池一馬（こいけ・かずま）｜彫刻家／画家。1980年生まれ、大阪府在住。幼少期をブエノスアイレス、高校時代をバルセロナで過ごす。日本大学藝術学部美術学科彫刻専攻卒業。主な展示に、cadet capela（パリ、2023年）、私立大室美術館（三重、2021年）など。

神馬啓佑（じんば・けいすけ）｜アーティスト。1985年生まれ。京都市在住。主な展示に「当然の結末＃6（共同住宅、個人的体験）」（LEESAYA、東京、2019年）など。

坂本森海（さかもと・かい）｜2025年1月11日（土）～3月16日（日）

《粘土で作って、焼いて、食って、焼く》2022年
撮影：大澤一太

坂本森海は1997年生まれの陶芸を主に制作する現代美術作家です。坂本は行く先々の土地で土を掘り、地域の歴史と地層を学び、自作の土窯を用いて作品を焼き上げます。これらの工程を全て自分で行うことで、焼き上がったモノが纏う偶有性と戯れます 。その興味は土との対話、焼成というコントローラブルではないパフォーマンス 、出来上がった焼きものを手に取ったり、口に当てたりすることでのコミュニケーションといった世界との本質的な関係性を探る行為にあります。
会期中は、映像、写真と陶器で構成される展示だけではなく、土と焼きものを用いた参加型のワークショップやパフォーマンスなどを行い、鑑賞者が環境と自分とを深く見つめ直す機会を作ることを構想しています。

陶芸家、美術家。1997年生まれ。2019年旧京都造形芸術大学美術工芸学科総合造形コースを卒業。同年からシェアスタジオ山中suplex に在籍。陶芸の制作過程に着目し、「陶芸」の枠組みを解体・再構築しながら展開している。主な展覧会に、「ATAMI ART GRANT 2023」）熱海駅地下通路、2023年）、「Ceremonial Ceramics -身體感/やわらかな石-」（山中suplexの別棟「MINE」、大阪、2023年）など。

迎英里子（むかい・えりこ）｜2025年3月29日（土）～6月1日（日）

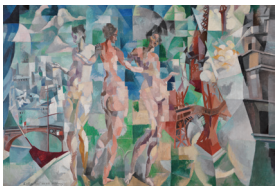
《アプローチ 13.0》2022年
撮影：松見拓也

迎英里子は、屠畜や石油の採掘、水蒸気の循環、毛織物産業など、社会で不可視の、あるいは全貌を把握できない事象やシステムをモチーフとし、等身大の装置を用いたパフォーマンスを通じて「接近」することを試みてきました。木材や布、ビニールなどの日用品で構成された装置とそれを動かす淡々とした身振りからなるパフォーマンスは、迎によって解釈され再構築された一連の抽象的なメカニズムとして示されます。この「アプローチ」というシリーズでは、迎自身が「わからないもの」へ視線をむけ、近づくための実践と言えます。それは単なる理解のための反復行為ではなく、私たちが作品をどのように見るかについても照射します。本展では、即物的あるいは観念的な理解や誤読、わからなさを抱えることも含めた様々なアプローチによる作品が提示されるでしょう。

1990年兵庫県生まれ。2015年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。主な展覧会に、国際芸術祭「あいち2022」（墨会館・小信中島公民館、愛知、2022年）、「ARTS & ROUTES -あわいをたどる旅-」（秋田県立近代美術館、2020年）、「OPEN SITE 2017–2018『不純物と免疫』」（トーキョーアーツアンドスペース本郷、東京、2017年）など

その他の主な展覧会　*問い合わせ先は各広報事務局となります。

「パリ ポンピドゥーセンター　キュビスム展—美の革命
ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」【開催中】
会期：2024年3月20日（水・祝）～7月7日（日）
会場：本館 北回廊1階、南回廊1階 https://cubisme.exhn.jp/
主催：ポンピドゥーセンター、日本経済新聞社、テレビ大阪、京都新聞、京都市
問合せ先：「キュビスム展」広報事務局（株式会社OHANA内）
E-mail：cubisme@ohanapr.co.jp


ロベール・ドローネー《パリ市》1910-1912年
Centre Pompidou, Paris, Musée national d'art moderne - Centre de création industrielle (Achat de l'État, 1936. Attribution, 1937)
© Centre Pompidou, MNAM-CCI/Georges Meguerditchian/Dist. RMN-GP

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2024
川田喜久治「見えない地図」
川内倫子「Cui Cui ＋ as it is」／
潮田登久子「冷蔵庫＋マイハズバンド」
会期：2024年4月13日（土）～5月12日（日）
会場：本館 南回廊2階 https://www.kyotographie.jp/
主催：一般社団法人KYOTOGRAPHIE
問合せ先：KYOTOGRAPHIE事務局
E-mail：press@kyotographie.jp

川田喜久治
©Kikuji Kawada, courtesy PGI

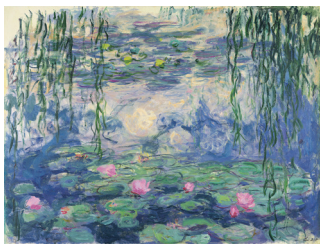
川内倫子
©Rinko Kawauchi

潮田登久子
©Tokuko Ushioda, Courtesy PGI

「奥村厚一 光の風景画家」
会期：2024年7月19日（金）～9月8日（日）
会場：本館 北回廊1階
主催：ライブエグザム、BSフジ、京都新聞、京都市

奥村厚一《浄晨》1946年
東京藝術大学蔵

「モネ　睡蓮のとき」
会期：2025年3月7日（金）～6月8日（日）
会場：本館 北回廊1階、南回廊1階　https://www.ntv.co.jp/monet2024/


クロード・モネ《睡蓮》1916-1919年頃　油彩／カンヴァス
マルモッタン・モネ美術館、パリ
© musée Marmottan Monet